



Data

監督・脚本：デスティン・ダニエル・クレットン

原作：ジャネット・ウォールズ『ガラスの城の約束』（ハヤカワ文庫）

出演：ブリー・ラーソン/ウディ・ハレルソン/ナオミ・ワッツ/マックス・グリーンフィールド/セーラ・スヌーク/ジョシュ・カラス/ブリジット・ランディ=ペイン

👁️👁️ みどころ

一家6人で各地を転々としながら自由に気ままな生活を！

ウォールズ家の父親は、そんな教育方針で4人の姉弟たちを！義務教育なんてクソくらえ。自然の中で学べば、大きく強く賢く成長するはずだ。エンジニアの俺は、家族のためにいつか「ガラスの城」を建てなければ・・・。

『若草物語』（1868年）と同じように、ウォールズ家の次女が書いた原作小説が大ヒット！1989年、彼女は人気コラムニストとして成功していたが、その原動力になったのは父親への反発心！そりゃそうだろう。すると、父親が病に倒れた今は、ざまあみる！いやいや、そうではないから人間は面白い。

教育とは？この子育ての是非は？この父親の是非は？本作からそれをしっかり考えたい。



■□■ 1989年。中国やドイツと違いニューヨークでは？ ■□■

日本は1989年にバブルが崩壊するとともに昭和から平成へと時代が大きく転換したが、この1989年は、中国では6月4日に天安門事件が、ドイツでは11月10日に東西の壁が崩壊した世界史的な転換の年。

しかし、そんな1989年、米国ニューヨークでは、「ニューヨーク・マガジン」で活躍する人気コラムニストのジャネット・ウォールズ（ブリー・ラーソン）は、パークアベニューの瀟洒なアパートメントでファイナンシャル・アドバイザーである恋人、デヴィッド（マックス・グリーンフィールド）と仲良く暮っていた。そんな冒頭のシーンに続いて、スクリーン上では、ある夜ジャネットとデヴィッドが高級レストランで顧客と会話を交わ

す風景が描かれる。そこで、ジャンネットの両親について質問が及ぶと、ジャンネットは「母はアーティストで、父は起業家です。質の悪い漂青炭を効率よく燃やす技術を開発しています」と語り、デヴィッドもそれに相づちを打っていたが、実はこれは真っ赤なウソ！

それは、レストランからの帰り道、車道に飛び出してきたホームレスの男性をタクシーの中からジャンネットが見つめるシーンを見ればよくわかる。実は、この男こそジャンネットの父親レックス・ウォールズ（ウディ・ハレルソン）なのだが、さらに、母親のローズマリー・ウォールズ（ナオミ・ワッツ）も実は……。この娘と両親のアンバランスさは、一体ナニ？

■□■なぜ狼の叫びの真似ゴトを？子供たちの教育は？■□■

4月30日に観た『幸福なラザロ』（18年）では、狂言誘拐を主導した地主の一人息子と、それに盲目的に従ったラザロが荒野の中で狼の声を真似て叫ぶシーンが印象的だった。本作の予告編でもそれと同じように、子供時代のジャンネットが荒野の中で父親と2人で狼の声を真似て叫ぶシーンが登場していた。ラザロは狼の群れの中に一人で取り残されても命を長らえるイエスキリストの使徒のような人物だからそんなシーンがピッタリだったが、本作でそんなシーンを登場させたのはなぜ？それは、ウォールズ家の何とも風変わりな家族風景と子供たちの教育方針を暗示するためだ。

前述したように、ジャンネットの両親についての説明は真っ赤なウソ。たしかに父親のレックスはエンジニアだが、わがままで我が道を行く男だから、勤め人はとてもムリ。定住する家もなく、この両親と子供4人の家族はいつも1台の車に乗って各地を転々と流浪していた。アーティストを目指している画家の母親ローズマリーも、父親と似たり寄ったりで、そんな生活を共に楽しんでた。したがって、4人の子供たちの教育は学校にも行かず、「教育とは自然の現場で自ら体験を重ねること」というレックスの持論どおりに実践されていた。

ある日、幼い次女のジャンネットが「お腹が空いた！」と訴えると、母親のローズマリーは「食べるのには一時間かかる、でも、ママの絵は一生残るのよ」と言うだけ。そのため、ジャンネットはいつものように一人でソーセージをゆで始めたが、踏み台から鍋を覗き込む中スカートにコンロの火が燃えうつり、大やけどを負ってしまうことに。そんなジャンネットを入院させた病院は、両親の育児放棄を疑ったのは当然だが、それでもレックスは弟のブライアン・ウォールズ（ジョシュ・カラス）を巻き込んだ「ある作戦」でジャンネットを病院から奪取することに成功。そのまま家族そろって荒野の中へ車を進めての野宿と相なったが、星空を見上げながらのレックスとの語らいで父親は、「いつかこのやけどはお前が強いという証になる」と説いていた。しかし、このようなわかったようなわからないような教育の是非は？

ちなみに、レックスが利発な次女ジャンネットを呼ぶ時はいつも「チビヤギ」だが、その

言葉には一体どんな愛情と期待が・・・？

■□■原作は？主演は？ジャネットとジョーの異同は？■□■

私は年甲斐もなく（？）アメリカの作家レイザ・メイ・オルコットが書いた小説『若草物語』（1868年）が大好き。それはきっと、思春期に観たエリザベス・テイラーらが出演した映画『若草物語』（49年）を観たためだ。『若草物語』では両親と4人姉妹から成るマーチ家の家族の在り方が、次女で小説家志望だったジョーの目線から描かれていた。それに対して本作では、ジョーと同じく物書きになることを目指している次女ジャネットの目線から、両親と4人姉弟から成るウォールズ家の家族の在り方が描かれていく。

『若草物語』では、ジョーの父親は南北戦争に出征している軍人で、留守宅は貧しかったが、母親は子供たちに愛情をいっぱいふりそそぐ理想的な女性だった。また、マーチ家の隣人は恐ろしい孤独暮らしのおじいさんだったから、ジョーを除く3人の姉妹たちは交際を避けていたが、活発で利発なジョーだけは別。しかし、『若草物語』の内容は小説家を目指すジョーのさまざまな“奮闘”を描く自伝的な物語になっていた。しかし、本作にみるウォールズ家の両親はまともなマーチ家の両親とは大違いで、ハチャメチャだったから、ジャネットはニューヨークに出て恋人のデヴィッドと仲良くなるまでは何とも波瀾万丈の人生を送ることになる。その面白さもあってか、ジャネット・ウォールズの自叙伝『The Glass Castle』は出版界で大注目を浴び、7年もの間、ベストセラーリストに君臨し続けたそうだ。その理由は、遊牧民のように社会のルールを無視して、気ままに生きる両親の暮らしぶりが読者の心を捉えたためらしい。

子供時代のジャネットは父親と一緒に荒野で狼を真似た叫び声を上げていれば楽しかったが、娘時代にもなると、酒浸りになり時としては暴力も振るう父親はジャネットにとって敵のような存在。ジャネットが少しでも早くこの父から離れてニューヨークに行き、自立を目指したのは当然だ。そして、やっと1989年には冒頭の幸せそうな姿になり、本作ラストではデヴィッドとの婚約パーティーに至るまでになったわけだ。もちろん、そこには父親はもちろん母親の姿もなし！そんな“予定”だったが、さて現実は何・・・？

『若草物語』はジョーの小説がはじめて世に認められるところで終わったが、さて本作は？人気コラムニストとしてやっと世間に認められ、デヴィッドとの婚約に至ったジャネットは、重篤な病気になってベッドで寝ている父親を本当に見放してしまうのだろうか？そりゃ当然、あんな父親だもの！いやいや、あんな父親でも・・・？

■□■3人（4人？）の名優の名演技のオンパレードに注目！■□■

本作は冒頭に登場する成長したジャネットと、スカートを焼かれたことによってお腹の周りに醜いやけどの痕を残した子供時代のジャネットを交差させながら描いていく。成人したジャネットを演じたブリー・ラーソンは『ROOM』（15年）（『シネマ 37』10頁）の

演技でアカデミー賞主演女優賞をはじめ多くの賞を受賞した女優だから、演技が達人なのは当然。しかし、本作では子供時代のジャネットを演じた子役の演技もすごいから、それにも注目！

他方、あの父親の下で父親に負けないほどの自由さで4人の子供たちをたくましく育てるのが、優しいけれども自由気ままな母親・ローズマリーだが、若い頃のローズマリーはすごい美人。そして、「この顔は俺もよく見ている顔だ」と思って確認すると、何と彼女はナオミ・ワッツだったからビックリ。さらに、本作全編を通じて圧倒的な存在感を見せつけるのが、父親のレックスを演ずるウディ・ハレルソンだが、彼はつい最近の『LBJ ケネディの意思を継いだ男』(16年)、『シネマ43』50頁)で、アメリカでは全然大衆に人気のないジョンソン副大統領(ジョン・F・ケネディ大統領の暗殺後の第36代大統領)を演じて注目された演技派だ。山田洋次監督流に今ドキの日本の家族を温かくかつユーモアたっぷりに描いた『家族はつらいよ』(16年)、『シネマ37』131頁)、『家族はつらいよ2』(17年)、『シネマ40』未掲載)、『家族はつらいよIII 妻よ薔薇のように』(18年)、『シネマ42』未掲載)は橋爪功、吉行和子、西村雅彦、妻夫木聡、蒼井優ら名優のオンパレードだったが、本作はこのビッグ3(プラス1人の子役)のオンパレードだけでも圧巻！三人三様(四人四様)の名演技に注目！

■□■遂にガラスの城づくりに着手！しかし・・・■□■

私は2019年1月に70歳になったが、1974年4月の弁護士登録以降、最初に住宅ローンで買った小さな家をタネにして、何度か大きな家を買いかえていった。また、時代が高度経済成長と不動産バブルに入っていく中、不動産の購入、売却、賃貸、借借を何度も経験した。そのため、自宅の引っ越しと事務所の引っ越しは10回以上になっている。

私の場合はその過程の中で不動産資産を残すことができたが、レックスの頭の中にはもともと資産形成という概念がないうえ、定住する家すら必要なしという考えだったから、一家6人が車に乗ってあちこちを移住しながら空き家同然の家に勝手に住み込み、問題になれば出ていくという、法を無視した生活を平気で続けていた。しかし、ある日レックスの母、つまりジャネットたちの祖母アーマが、ジャネットの弟のブライアンに対してセクハラ行為を加えていたことが判明。これを契機に両親と距離を置くことにしたレックスは、生まれてはじめてローンで山の上の一軒家を買取るとともに、炭鉱夫の仕事に就くことを決意。そして、ついに念願の「ガラスの城」づくりに着手したから、一家は大喜び。太陽光をいっぱい取り入れるべく、まずは庭先で土台の穴を掘る重作業が待っていたが、一家は笑顔いっぱいになんか取り組んだ。ところが、アレレ、レックスは・・・？

本作ラストには、長い間浴びるように酒を飲み、いつもブカブカと煙草を吸っていたことが原因で重篤な病状になり、死の床に伏せているレックスの姿が登場する。そもそも、レックスは炭鉱夫のような肉体労働はもとより、サラリーマンそのものが向かない、根っ

からの“自由人”、“野生人”だったわけだ。そんなレックスだから、何でも好きなことを好きなようにやるのが当然で、自分の勉強が自己流なら、子育ても自己流。そして、酒も煙草も（ひょっとして女も？）自由なのが当然だった。そのためある日、せっかく着手したガラスの城づくりは挫折し、ガラスの城の穴はゴミを捨てる穴と化し、レックスの酒の量は増え、家で暴れるようになったから大変だ。

本作中盤には、ジャンネットがレックスに対して、「お酒をやめて」と懇願し、それを受け入れたレックスが断酒に挑戦するシークエンスが登場する。もちろん、これも医者と相談し入院して行う断酒治療ではなく、あくまでレックスの我流のものだから、かなり乱暴なもの。しかし、努力の甲斐あって断酒を成功させたレックスが、数日後穏やかな笑顔で妻子の前に登場してきたから万々歳。さあ、これからもう一度、ガラスの城の建設に！ところが、現実は予想以上に厳しかったようだから、それはあなた自身の目でしっかりと。

そんな父親の姿を見たジャンネットは、今度は母親に「パパと別れて」と訴えたが、ローズマリーはきっぱりと「それはできない」と回答。あの父親にしてこの母親あり。この両親には小さな子供たちの理解を超えた強固な結びつきがあったらしい。そうなれば、ジャンネットを含む子供たちの選択はただ一つ。それは、自立してここから出ていくことだ。そして6年後、高校生になった長女ローリ・ウォールズ（セーラ・スヌーク）はニューヨークへ旅立つことに。すると次は、次女ジャンネットの番だ。さあ、ジャンネットの自立とニューヨークへの旅立ちは・・・？

■□■教育のあり方は？この子育ては？この父親は？■□■

教育はいかにあるべきか？子育てはどうすればいいのか？それをテーマにした議論は盛んだし、中国数千年の歴史の中では、孟子による「孟母三遷の教え」をはじめとするさまざまな教育論が今日まで生き残っている。日本では、戦後6・3・3制と義務教育の制度が始まったが、義務教育がホントにベストなのか否かは難しい。本作にみる、レックスの「自然の中に子供を放り込むことが教育だ」という（極端な）考え方もあるわけだ。ちなみに、本作では泳ぎを教えるについて、レックスはジャンネットをプールの中で突き放していたが、今ドキこんなことをすれば児童虐待と見なされるのは当然。また、エンジニアのレックスは数学や自然科学に強いと自覚し、子供たちにさまざまな真理を教えていると確信していたが、それは如何なもの・・・？

また、日本では父親が子供に体罰を加えるのは当然で、それは権利であると同時に義務でもあると考えられていた。私も小学生の時までは父親に体罰（暴力？）を受けていたが、今ドキそんなことをすれば大変。しかし、逆に優しいだけの父親でホントにいいの？そんな疑問もある。本作にみるレックスが理想的な父親と言えないのはもちろん、平均点にも達しない落第パパであることは明かだが、それでもジャンネットが書いた原作小説がベストセラーを続けているのは一体なぜ？それは、本作ラストにみるジャンネットの選択を含め

て、レックスの父親としてのあり方に反発だけでなく共感を覚えるものがあるため。つまり、理想的なあるべき教育論、子育て論などどこにも存在せず、さまざまなケースを見て勉強していくしかないわけだ。

そう考えると、本作はまさにその絶好の教材。しかして、本作に登場したジャネットとレックス、さらに母親のローズマリーを含めた教育のあり方は？この子育ての是非はこの父親の是非は？

2019（令和元）年6月25日記